

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

August 2007 vol.5



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「ボックスアート プラモデルパッケージ原画と戦後の日本文化」

ボックスアート 夢と憧れを描く絵画

企画展「川村記念美術館所蔵 巨匠と出会う名画展 ピカソ、ルノワール、モネ、大観、光琳、等伯…」

レンブラントとモダン・アートのコレクション

もっと楽しむ、コレクション展「鷗外の文学と美術」

鷗外がみせた親愛の情 画家たちへのまなざし



川上恭弘
TAMIYA 1/12ビッグスケール《Honda F-1》
1967年 (株)タミヤ蔵

5

「ボックスアート プラモデルパッケージ原画と戦後の日本文化」

2007年8月10日(金)～10月8日(月)

休館日：火曜日(ただし8月14日は開館) 開館時間：午後10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A. 小松崎茂
TAMIYA 1/35 戦車シリーズ(シングル)
《ドイツ パンサータンク》
1961年 (株)タミヤ蔵

B. 島村英二
TAMIYA 1/24 スポーツカーシリーズ
《ランボルギーニ・カウンタックLP500S》
1978年 (株)タミヤ蔵

C. 小松崎茂
IMAI パズル人形付
《サンダーバードTB2号》
1971年 (株)東北新社蔵

©TAMIYA, TM and
©1964, 1999 and 2006 ITC Entertainment Group Limited.
THUNDERBIRDS is a Gerry Anderson Production Licensed
by Granada Ventures

ボックスアート 夢と憧れを描く絵画

ボックスアートとは、プラモデルの箱絵のことである。箱の顔を飾るので、正確にはボックスアートと言うのだが、日本の業界ではボックスアートで通っている。今回の展覧会に出品されるボックスアートはタミヤ、ハセガワ、アオシマ、バンダイと、名前を聞くだけで心躍るプラモデルメーカーが大切に保存してきた原画を一堂に公開する初めての展覧会である。プラモデルを作ったことのある人ならば、模型屋へ行って何を作ろうか迷った経験を持っているだろう。その時にプラモデルの箱に描かれた絵、ボックスアートに誘われて選んだことはないだろうか。箱の中身はまだ部品でも、外には完成形が描かれている。できあがり想像し、こんなものを作りたいと誰もが思ったのではないだろうか。ボックスアートにはそうした何ともいえないある種の魅力、あるいは創作へ誘う魔力が秘められている。

ここで簡単にプラモデルの歴史を振り返ってみたい。プラモデルは1936年のイギリスで誕生した。そして海を渡り、第2次世界大戦後のアメリカでブームをおこす。日本では昭和30年前後に一般に販売され始めた。最初期はアメリカから輸入された高級品であったが、1958(昭和33)年にマルサン商店が「プラモデル」という商標で国産初のプラモデルを販売。以後各メーカーが国産のプラモデル

をこぞって開発してゆく。プラモデルは瞬間に人々の心を捉え、全国へ普及していった。それまで国内で主流であった木製の模型キットは廃れ、日本の高度成長を背景にプラモデルの黄金時代がやってくる。

そんなプラモデル人気を後押ししたのがボックスアートである。その第一号が1961(昭和36)年タミヤから発売された1/35「ドイツ パンサータンク」だ。当時少年雑誌で活躍していた人気イラストレーター小松崎茂が描いたこの作品には、戦いの最中、砲身から火を噴き、敵を打ち落としながら戦場を走る勇ましいタイガー戦車の様子が劇的に描かれている。少年雑誌で戦記物に熱中していた子供たちは、この絵に敏感に反応した。1/35「ドイツ パンサータンク」はタミヤの大ヒット商品となり、ボックスアートのその後の展開を決定づけたのである。当然各社もこれに続き、多くのボックスアートが誕生した。

小松崎が最も活躍した1960年代のボックスアートには、実に生き生きと劇的に戦闘シーンが描かれている。まかり間違くと戦争画とも戦争礼賛とも取られかねない内容なのだが、まるで娯楽映画のワンシーンのように罪がなく、軍国主義的な臭いがない。絵の様式は、戦時中に描かれた戦争画にルーツを見いだせるのだが、あきらかに何かが違うの

だ。戦争画のほとんどが国民の戦意高揚をねらったプロパガンダの役割を担っていたのは周知の事実だが、小松崎の絵に代表されるミリタリー系のボックスアートは、消費者の購買欲を刺激する必要はあっても、戦意高揚をねらう必要はない。それゆえ人の闘争心を刺激する内容であっても、その闘争心はワールドカップで自国の選手を応援し、相手国から勝利を得ようとするスポーツの感覚に近く、それに歴史的事実という物語性が加味されて、あの独特の魅力ができあがっているのではないだろうか。プラモデルのその後の展開がF-1等のスポーツカーやスーパーカーブームであるのも、平和な時代にあって闘争心がスピードへの憧れに変わったと捉えることができるだろうし、ガンダムなどのアニメーションは、現代に展開される新しい戦記物と考えることもできるのだ。

こうして時代を追いながらボックスアートを見ていくと、戦後日本が歩んだ道をそのまま反映しながら人々の夢を育んできたことがわかる。大人たちからも戦後美術史の王道からも、忌避された戦争画の遺伝子は、その理念を変えてボックスアートという形でひろく大衆に受け入れられ、私たちの目を楽しませてくれている。

(真住貴子 当館主任学芸員)



図1



図2



図3

図1. レンブラント・ファン・レイン《広つば帽を被った男》
1635年 川村記念美術館蔵

図2. カジミール・マレーヴィッチ《シュプレマティズム No.55》
1917年 川村記念美術館蔵

図3. ヴェラ・ロトニーナ
ロシア・アヴァンギャルド期のテキスタイル《海上の艦隊》
1929-30年 当館蔵

レンブラントとモダン・アートのコレクション

今年の秋に開催される「川村記念美術館所蔵 巨匠と出会う名画展」は、千葉県佐倉市にある川村記念美術館のコレクションの主要な作品を展示する展覧会。川村記念美術館は、レンブラントからモネ、ルノワール、そしてポロックやウォーホル、ステラにいたる西洋絵画に加えて、重要文化財の光琳の屏風など日本絵画の名品も所蔵している。幅広い収蔵品のなかでも特に欧米のモダン・アートの作品が充実したコレクションである。

本展も20世紀の絵画が中心になるが、1635年に描かれたレンブラントの《広つば帽を被った男》(図1)は、川村記念美術館の収蔵品を代表する1点である。レンブラントは、17世紀オランダの最も有名な画家で肖像画の名手。この作品が描かれた前年には結婚し、オランダ第一の都市アムステルダムで評判の画家になり始めていた。本作品もレンブラントの典型的な肖像画であり、描かれた人物の襟の白いレースや黒い洋服のリアルな描写、表情の描き方にその才能を感じることができる。裕福そうなこのモデルの人物が誰かはわかっていないが、女性の肖像画と対になる作品として描かれた。女性の肖像画の方は、アメリカのクレーヴランド美術館に収蔵され、ふたつの肖像画は現

在別れ別れになっている。また本作品は楕円形のカンヴァスの作品であるが、もともとは長方形の檜の板に描かれていたらしい。それが後世、楕円形に変えられて、さらに板が削り取られて、絵の具の層だけがカンヴァスに移された。カンヴァスに移されたのは板の反りや割れによって作品が傷むのを防ぐためである。こうして紆余曲折を経て川村記念美術館に収蔵された本作品は、現在、国内では収蔵されている例の少ない貴重なレンブラントの油彩画として、川村記念美術館の顔になっている。

このレンブラントの《広つば帽を被った男》から280年ほど後、ロシアの画家マレーヴィッチは、白地のカンヴァスいっぱいに黒い形をひとつだけ描いた《シュプレマティズム No.55》(図2)を制作した。作品が描かれた1917年はロシア革命が起こった年である。この時期のロシアでは政治体制が変わっただけでなく、芸術の分野でも後にロシア・アヴァンギャルドとよばれる前衛的な芸術運動が起こり、マレーヴィッチはその先頭に立った画家だった。本展にも作品が展示されるシャガールやカンディンスキーも外国から戻り、この革命後のロシアで活躍している。当時の芸術家は革命政府を支持し、革命を宣伝するような仕事にも携わった。当館で

もロシア・アヴァンギャルドの時代のテキスタイルやそのデザイン画を収蔵しているが、近代化された農業や、軍隊を描いたものなど、やはり革命の成果を示すものが多い(図3)。一方マレーヴィッチは、本作品のような白いカンヴァスに四角や円、十字形など基本的な形態だけを描いた絵画を発表して、「シュプレマティズム」と名付けた。これは、目に見える人物や風景などを描く具象的な絵画ではない、世界でも最も早い時期の抽象絵画のひとつであった。「シュプレマティズム」という言葉にも「至高、最高」という意味が込められており、革命期のロシアのラディカルな姿勢が伝わってくる。

本展では、こうした17世紀のレンブラントの肖像画から20世紀の初めのマレーヴィッチの抽象絵画、そしてコレクションの中心的な部分である戦後のアメリカ美術へたどり着いた西洋絵画の歴史を見ることができる。また西洋絵画だけでなく彫刻などの立体作品、日本の屏風も展示し、国内屈指の川村記念美術館のコレクションの選りすぐりの名品を鑑賞することができる中国地方で初めての展覧会となる。

もっと楽しむ、コレクション展 「鷗外の文学と美術」

2007年10月15日(月)まで 展示室B

鷗外がみせた親愛の情 画家たちへのまなざし

鷗外の著作には、友人の画家が登場する随筆や小説があり、それを読むと鷗外がどのような友達づきあいをしてきたかを知ることができる。例えば、早世した親友、原田直次郎の追悼文には、次のような一節がある。「私の友人にも女房持のものは少ないが、その家庭を伺って見て、実に温かに感じられたのは、原田の家庭である。(中略)原田と細君と子供四人と、そこに睦む暮らして居て、私が往けば子供は左右から、おじさんと呼んで取りついた。細君はいつも晴々とした顔色で居られて…(後略)」

鷗外が20代後半から30代の頃のエピソード。友人の家でつろぎ、子どもたちにまわりつかれてニコニコしている姿が目に見え、

ちなみにこの文章の執筆当時、鷗外は最初の妻と離婚し、単身で小倉に勤務していた。あるいは小説「天寵」において、展覧会に出した絵を落とされた画学生M君=宮芳平が、審査員である私=鷗外の家を突然訪ね、なぜ落選したかを問う場面は、次のように描写されている。

「一体refusés*は他の落伍者と同じく、逢って心持の好い人は少いものである。それにM君はいかにも無邪気で、その口吻には詞を構えて言うような形跡が少しもなかった。私は聞いているうちに気の毒になったので、『兎に角上がり給え』といって、書齋へ通して茶などをすすめた。」

鷗外この時53歳。押しかけてきた初対面

の若者に好感を抱き、つい同情してしまい、お茶まで出している。意外と人の好いおじさんである。これを機に、子供ほどの年の苦学生との交際が始まった。

このたびのコレクション展では、絵画に添えて、その作者を鷗外がどのように記述したかを紹介する。鷗外の文章と画家の作品の双方を、より深く味わっていただきたい。

* refusés = (仏語) 落選者
※鷗外の文章は、読みやすいよう現代使われている漢字、かな使用に改めた

(川西由里 当館主任学芸員)



A



B

A. 『新著百種』第12号
原田直次郎が表紙画を担当、
鷗外の「文つかひ」収録
1891(明治24)年発行

B. 宮芳平《自画像》
1920(大正9)年

A, B共に当館蔵



「森鷗外と美術」展の図録が、「2006年 美連協 優秀カタログ賞」を受賞しました!

昨年開催した「森鷗外と美術」展の図録が、美術館連合協議会の優秀カタログ賞に選ばれました。関係者の皆様のご支援と、当館ならびに共同開催館のスタッフの協力のおかげで、「え?これ図録なの?」と言われる368ページの分厚い本を作り上げることができました。ステキな装丁をしてくださった野村デザイン制作室、そしてお買い上げくださったみなさまにもお礼申し上げます。

展覧会は当館で7月14日～8月28日に開催した後、和歌山県立近代美術館、静岡県立美術館を巡回しました。多くの方にご覧いただき、新聞や美術雑誌にも多数、展覧会評が掲載されました。ご来場いただいたみなさま、本当にありがとうございました。(川西)